

「北方の王者」は歴史を変えるか！？

深浦歴史シンポに参加して



青森県深浦町で9月23・24日の2日間、シンポジウムがあった。安藤氏に関わるシンポで、町が主催する「人づくり歴史講座」十年間の集大成として開催されたという。十年もの間、地域の歴史に絞って歴史講座を続けるのは決して楽ではない。そういう継続性ある社会教育のあり方もさることながら、以前からこの地域史には関心があったので、どのような些細なことでも参考になる知見が得られればと思い、参加してみた。

左はこのシンポのチラシ。
「アンジェリスの蝦夷・日本図」

日本海の島々や松前、深浦、男鹿などが強調されて描かれている点に注意したい。また、十三（湊）から内陸に入り込んだ川が描かれている点も見逃すわけにはいかない。十三は安藤（安東）のもう一つの拠点で、津軽内部への結節点でもあった。

安藤（安東）氏の本拠とされる大館跡から海を眺めると、北海道が間近に見える。この日は雨模様だったが、松前の島影は見えた。大館跡は、安藤（安東）が北を向いた集団であったことを感じさせる遺跡である。



深浦町に隣接する岩崎町にある森山城跡。写真の頂部に行ったが、削平地などはみられない。鞍部は堀切のような縦方向の凹みが見られたが、人工かどうかは判断できなかった。立地としてはチャシに近いという印象を受けた。なお、写真の左は日本海で、海上を眺める位置としては最適な場所ではある。城の中核部は右手の山上（実は段丘）に連なるらしい。

「関の板碑」（覆屋のあるところ）。中世の板碑が多く並べられている。この「関」とは、ある時期、出羽と陸奥の境界だったので、そう呼ばれた。その境界にこうした板碑や「亀杉」と言われる霊木があるのは興味深い。最近この亀杉の根元から瀬戸焼の骨蔵器の完形品が出土しており、中には骨も残っていた。「亀杉」は「甕杉」だったようだ。



写真は2枚とも二日目の現地見学会の様子

「関の板碑」のある場所は、深浦町金ヶ沢というところだ。そこに「大館」「古館」「あまやけ」「陣ヶ森」という4つの館跡が隣接して並んでいる。板碑はそのうち「陣ヶ森」のテラス状の遺構に並べられている。斜面に沿ってテラスが造られているのが看取できる。ただ、これらすべてが館跡の遺構なのかという疑問も残る。とくに「あまやけ」はその地名から寺院の存在を示唆しているし、こうした板碑や骨蔵器があるのも臭う。いずれにせよ、今後の調査によって明らかになるのは間違いない。また、このシンポで興味深かったのは、十三湊の調査報告である。安東氏の拠点として栄えたところだが、北方系遺物の出土がほとんどないというのだ。北方世界との交易によって繁栄したと思っていたが、考古学的に証明されているわけではないようである。そして、沿海州方面も視野に入れて考古学的にみると、北方世界では13世紀に大きな変動があったという指摘も忘れられない。そういえば十三湊が機能し始めるのは13世紀だし、アイヌ文化の初源もこの頃とする見解もある。この点がはっきりしてくると、「日本史」も書替えられそうだ。

『深浦歴史シンポジウム資料』には遠藤巖氏による「安倍姓安藤・安東氏関係文献目録」が掲載されていて、非常に便利です。行った甲斐がありました。



"Shiro Fumi" No.19 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.